

# バスケットボール競技における オンボールスクリーンについての研究

## Research of the on-ball screen in Basketball

小津和 俊 洋

鈴木 淳

Toshihiro KOZUWA  
大学院保健体育コース

Jun SUZUKI  
保健体育講座

(平成26年9月30日受理)

本研究では、九州大学バスケットボール連盟に加盟している大学の指導者で、全日本学生バスケットボール選手権に5年連続で出場しており、成年国体のコーチや学生選抜でもコーチを努めた経験がある指導者A氏に対して、オンボールスクリーンに関する指導法をSACTという質的研究を用いて分析し、オンボールスクリーン成功の考え、オンボールスクリーンに関する指導方法、オンボールスクリーンの指導をどのように選手に伝えているかを調査することを目的とした。

その結果オンボールスクリーンの成功は、ズレを作り数的有利を作り出すことが、指導者A氏が考えている成功だった。オンボールスクリーンの指導方法は、細かいファンダメンタルを行なうと選手の個性が制限されてしまうため、選手のもっている技術や考えを活かして、チームで決めたオフェンスのパターン練習を多くすることにより成功体験を体感してよいイメージでオフェンスが出来るように、練習の工夫をして行っていた。

指導者から選手への伝え方としては、動きをはっきりすることを選手に伝え、チームが描いている動きを表現出来ない場合は、指導者が具体的に動きの内容を伝えて選手を納得させた上でプレイを行なわせるという指導方法をとっていた。

キーワード：バスケットボール, オンボールスクリーン, 指導法

## I はじめに

### 1 バスケットボール競技の特性

バスケットボール競技は、ボールの所有とシュートの攻防をめぐり、対峙する2チームが同一コート内で同時に直接相手と対峙しながら、一定時間内に得点を争うゲームである。

一定時間内に得点を競うことから、攻撃のスピードやシュートの回数が、ゲームの展開上大きな要素になり、相手チームより多く攻撃を行なって正確にシュートを決めるには、攻撃の戦術が極めて重要なものである。(日本バスケットボール協会, 2002)

近年、バスケットボール競技における攻撃戦術、オンボールスクリーンは、様々なカテゴリー(中

学、高校、大学、およびJBLなど)で行なわれるようになってきている。世界選手権でも長身者と低身者のスクリーンプレイは盛んに行なわれていた。オンボールスクリーンプレイ後はポップアウト(内から外にへ出る動き)の技術を使い、アウトサイドでの攻撃を仕掛けてくる攻撃が多く見られた。(日馬, 2011)このように世界的にオンボールスクリーンの攻撃戦術は数多く使用されていることが考えられる。

スクリーンプレイとは、スクリーナー(スクリーンをセットするプレイヤー)の存在を利用して働こうとするスクリーンユーザーと呼ばれるプレイヤーのディフェンス1人を、そのユーザーとスクリーナーの2人同時に攻めることに寄って空間を

作り、空間を活かすプレイで、アフタースクリーン（スクリーン後の動き）も含めて様々な「間」を支配し、数的有利を作ろうとする集団攻撃戦術である。（清水ら, 2007）オンボールスクリーンは、これらの動きをボール保持者に対して行なうスクリーンである。

## 2 オンボールスクリーン（攻撃戦術）の指導を質的研究する意義

ボールゲームにおける戦術は、競技力を決定する最も重要な要因の1つである。したがって、戦術の発達の要因や過程を理論的・実践的に明らかにするには、個人およびチームの習熟段階や発達の方向を理解したり、長期的な視点をもって指導するのに役立ち、コーチングおよびトレーニングの場に有効な知見を提供できると考えられる。（會田, 1994）

オンボールスクリーンに関する研究は、オンボールスクリーンを数量化し、統計処理することによって客観的に評価を行なう手法の研究は数多くある。しかしそれだけでは、実際の指導現場では技術を修得する為の方法や技術の伝え方を指導者が理解することはできない。そこで、優れた指導者から指導方法や技術の背景などを得ることによって、他の指導者の指導に関する一助になると考えられる。

## 3 研究の目的

オンボールスクリーンを試合中に多く利用していると思われる指導者を対象に、オンボールスクリーン指導のコツに関する語りを質的に分析し、指導法の知見を得ることを目的とした。

## II 研究方法

### 1 対象者

対象者は、九州大学バスケットボール連盟に加盟している大学の指導者で、全日本学生バスケットボール選手権に5年連続で出場しており、成年国体のコーチや学生選抜でもコーチを努めた経験があり、オンボールスクリーンをチームで実践している指導者 A 氏 1 名。

対象者には、本研究の趣旨を事前に電話で十分説明し、調査への協力を得た。インタビュー調査に先立ち、いずれの質問に対しても回答を拒否出来ることを伝え、調査内容の音声 IC レコーダー記録した。

## 2 インタビュー調査内容与方法

調査内容は、①オンボールスクリーンの成功とはどのように考えているか、②成功する為の練習方法、③選手への伝え方、3つ内容であった。

インタビューは指導者と本研究執筆者の1対1で行なった、インタビューは指導者が宿泊しているホテルの部屋で実施した。インタビューの方法は、半構造化面接を用いて、インタビューの場では対象者の語りに敬意と好奇心を持って望むこと、語りに対して先入観を持たずに共感する態度を持ち合わせることを心がけた（武藤ら, 2011）。

## 3 データの分析

本研究では、SCAT（Step for Coding and Theorization）法を使用した。これは大谷（2007）により提唱された、グラウンデッド・セオリー法を基にした方法である。大谷によると、SCAT法はデータに記載されている内容をより一般的な表現へと変換する具体的な4ステップ

- (1) データの中の着目すべき語句
- (2) それを言い換える為のデータ外の語句
- (3) それを説明するための語句
- (4) そこから浮き上がるテーマ・構成概念

のコーディングと積み重ねたコーディングデータから一般的な理論を導き出そうとする手続きとから構成される。SCATは他の質的分析法と比べて、「1つだけのケースやデータ、アンケートの自由記述欄などの比較的小さな質的データの分析にも有効である」ことからこの分析方法で行なった。（竹之下ら, 2011）

データの妥当性および信頼性を保証する為に、調査内容をまとめたものを対象者に示し、それが発言の趣旨と異なっていないか、訂正箇所がないかを確認した。また、語りの内容がストーリーラインとして構成された時に、語りの内容が恣意的にされてないかどうかを確認するため、本研究に関わっていない1名の研究者に協力を求めた。この1名は、バスケットボールの研究に従事している指導者であった。

これによってデータ分析の信頼性と妥当性を高めた。

## III 結果

インタビュー記録を元に、SCATの4ステップコーディングを行い、そこからストーリーライン、理論的記述、さらに追及すべき点・課題を導き表1に示した。





いる。オンボールスクリーン成功の秘訣としては、チームで決めているルールを必ず実行すること、スクリーン後ダイブする途中に相手チームのディフェンスがいてもその場に停滞せずにリングにカットしてペイントエリアを通り抜ける動きを行なう。プレイをはっきり表現するということがあった。

## 2 理論記述

理論記述からは、以下の7つを得ることができた。

①ポジショニングの乱れを整えて、数的有利を作り出す。②セカンドチャンスを狙えるポジション取りを行なう。③他チームの戦術を参考にして自チーム選手の個人技を活かした攻撃の動きができる練習方法を作る。④相手ディフェンスを想定したオフenseのパターン練習。⑤練習で上手く表現出来ない選手に対しては、指導者が動きのポイントを噛み砕いて説明を行なう。⑥リングにカットしてペイントエリアを通り抜ける、プレイをはっきり行なう。⑦自分達の有利に進める戦術。

## IV 考察

### 1 オンボールスクリーンの成功について

指導者 A 氏は、オンボールスクリーンを利用して、「オフenseとディフェンスにズレを作り出すことができたなら成功と考えている、オンボールスクリーンを行い、ダイブするということは、誰かがペイントエリアに侵入していることなのでそのような動きが出来るということが一つの強みと思う。」ズレを作り出し、得点成功率が高いペイントエリアに人を侵入させることを成功と考えている。得点やアシストの成功を求めるのではなく、選手の動きや得点、アシストまでの過程を重要にしていることが示唆された。また、「オンボールスクリーンをオフenseのバランスを整える為に使用する場合もある。」と語っている。オンボールスクリーンを利用して、自チームに有利な展開でゲームを進めるためにもオンボールスクリーンを利用していることが考えられる。

すこし前であれば、ズレを作り出す方法としてパス & ランのモーションオフenseが主流だったが、現在では動きに対してディフェンスの対応は、多くの種類があり、簡単にはディフェンスを突破できない状況が多い。そこで、スクリーンを利用することでディフェンスとのズレを作りつつ、自分達の有利なポジションも取る事が出来るオンボールスクリーンを利用していることが考

えられる。

### 2 練習方法

オンボールスクリーンを成功させる為に行なっている練習方法については「分解した練習は大切だが細かいファンダメンタルは行なわない。オンボールスクリーンが成功するイメージを作らせる。」具体的には、4対0でオフenseのパターンを繰り返して練習を行なうことや、チームの約束「動きをはっきりさせる。ダイブのカットや、ポップアウトにパスを出す。パスをダイブに入れるだけだったら、相手に読まれるのでポップアウトも使いながら、パスを必ず出す。」と語っている。チームの決まりを実行した結果が得点やアシストにつながると考えている。つまり、得点をする為に、オンボールスクリーンを利用しているのではなく、動きを作り出す為にオンボールスクリーンを利用して、その過程に得点のチャンスが出てくると考えていることがわかる。

選手に対しても固定した考え方を指導するのではなく、相手にオフenseのパターンを対応させたら、自チームの動きもそれに合わせて変化させるといった柔軟な対応を求めている。そのような指導方法によって、選手達は試合の場面でも自ら状況を判断して、適切な方法で戦術を選択し、得点に結び付けている。

練習の中で上手く表現が出来ない選手に関しては、選手が理解するまで、戦術や動きを指導者が噛み砕いて説明を行い、選手が上手く表現できるまで練習をさせる。しかし、細かい動きまで徹底させてしまうと、その選手の個性や表現力を無くしてしまうので全てを変えるという指導は行なわない。そのような指導方法を行なうことで、相手チームもスカウティングを行なっても、固定した動きがないため、どのような戦術を用いて戦っているのか読みづらく対策が立てにくいチームになっているのではないだろうか。

### 3 選手への指導方法

「チームにいるガードが、オンボールスクリーンからダイブへのパスが上手いので、うちのチームがオンボールスクリーンを利用する一つの理由になっている。」という語りが示す通り、選手が持っている個性や技術を活かしながら戦術を利用し、指導者が示した方法を上手く表現出来ない場合は別のアプローチを使って、オンボールスクリーンを成功させる方法を取っている。細かい練習方法は取り入れず、まずは、全体の動きを確認

して成功体験をさせて実践に移る方法を取っている。しかし、全てを選手の個性の通り指導者が受け入れているのではない。「選手の適正を見極めて、ノーマークでシュートを打ってよい選手、ノーマークだがもう一回攻撃を作り直させる選手など、個人的にルールを設けている」と語っている。事前に選手の適正を見極めて、ある程度プレイの限定を行い、その中で個性を活かす指導方法を行っていた。

## V. まとめ

本研究では、九州大学バスケットボール連盟に加盟している大学の指導者で、全日本学生バスケットボール選手権に5年連続で出場しており、成年国体のコーチや学生選抜でもコーチを努めた経験がある指導者A氏に対して、オンボールスクリーンに関する指導法をSACTという質的研究を用いて分析し、オンボールスクリーン成功の考え、オンボールスクリーンに関する指導方法、オンボールスクリーンの指導をどのように選手に伝えているかを調査することを目的とした。

その結果オンボールスクリーンの成功は、ズレを作り数的有利を作りだすことが、指導者A氏が考えている成功だった。オンボールスクリーンの指導方法は、細かいファンダメンタルを行なうと選手の個性が制限されてしまうため、選手のもっている技術や考え活かして、チームで決めた、オフenseのパターン練習を多くすることにより成功体験を体感してよいイメージでオフense

スができるように練習に工夫をこらして行っていた。

指導者から選手への伝え方としては、動きをはっきりすることを選手に伝え、チームが描いている動きを表現出来ない場合は、指導者が具体的に動きの内容を伝えて選手を納得させて上でプレイを行わせるという指導方法をとっていた。

## 参考文献

- 1) 日本バスケットボール協会 (2002) バスケットボール指導教本 2-3
- 2) 日馬雄紀・掘英樹 バスケットボールのインサイドスクリーンにおける戦術的研究～pickプレイのディフェンスについて～ (2011) 49
- 3) 清水信行・三浦 健 大学男子バスケットボール競技におけるスクリーンプレイについての研究—鹿屋体育大学の九州1部リーグ戦での戦い— (2007) 36: 59-63
- 4) 武藤隆・山田洋子・南博文・麻生武・サトウタツヤ編 (2004) 質的心理学. 新曜社, 3-4
- 5) 竹之下典祥・馬見塚珠生 (2011) 学生の地域子育て支援ひろばへの参加による心理的变化の質的研究—SCAT導入による実習体験過程の理論的仮説生成の試み—
- 6) 大谷尚 (2007) SCAT: Steps for Coding and Theorization —明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—

